

都市と絵画の防衛機制——ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニとシエナ戦争

松原 知生（西南学院大学）

イタリア美術にきわめて深い心的外傷（トラウマ）を刻印したとされる出来事としては、1348年の黒死病流行と、1527年のローマ劫掠が知られている。前者はミース、後者はシャステルによる詳細な研究の対象となっているが、イタリア全体からシエナという一都市の歴史に目を向けたとき、これらと同様に（あるいはそれ以上に）衝撃的な事件として記憶されているのが、1552年に始まるシエナ戦争と、それに続く共和国滅亡（1555年）である。このトラウマ的な出来事が同時代芸術にどのように反響したのかという未着手の問題を考えるにあたり注目されるのが、画家・建築家ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニである。実際、彼はシエナ戦争時、軍事技師として要塞の設計や市壁の拡充など都市の防衛に尽力すると同時に、この戦争にまつわる絵画作品を手がけてもいるのである。本発表では、従来切り離して考えられがちだったこれら2つの活動に関連づけ、さらに画面構造の分析と歴史的背景の解明を連動させることで、戦争の経緯と共和国の滅亡がジョルジョの絵画作品にいかなる影を落としているのかを考察したい。

ここで主に分析されるのは、すでにジョルジョ作と認定されている小板絵《シエナ市民を励ます聖パウロ》（シエナ、国立文書館）、および今回新たにジョルジョへの帰属を試みるフレスコ画《無原罪懐胎の聖母》（同、サン・ピエトロ・アッラ・マジョーネ聖堂）の2点である。両者を比較すると、いずれも中央に大きく聖なる人物像を、その足下や背後に庇護されるかのようにシエナの都市風景を配している点、またとりわけ、戦争で被害を受けたシエナの町あるいはその一部の街区を隠蔽するように表象しているという点で、興味深い類似性を示していることが理解される。都市の軍事的な「防衛」を担当したジョルジョ・ディ・ジョヴァンニによるこれら同時代の絵画イメージには、精神分析的な意味での「防衛機制」の働きも同様に見出すことができるのである。

さらに、心的外傷とその視覚イメージにおける防衛機制という問題は、ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニ以後の画家たちにも引き継がれていく。とりわけ重要な作例が、アルカンジェロ・サルインベーニによるフレスコ画《シエナの町を庇護する被昇天の聖母》（1580年、シエナ、サン・ベルナルディーノ祈祷所）である。一見トラウマが解消されたかのように、シエナ戦争の激戦区をあからさまに前景化しているこの作品においてもやはり、勝利者メディチ家による大要塞の建設という新たなトラウマに対する心的「防衛」、あるいはイメージにおけるその存在の「検閲」のメカニズムが作動しているのである。

以上の考察は、16世紀シエナ絵画研究に新たな視座をもたらすのみならず、トラウマとその表象（不）可能性という、より一般的かつアクチュアルな問題系の解明にもいささか寄与するところがあるだろう。